

B 福島フィールドワーク

○概要

過去の国内班の活動実績を踏まえて、フィールドワーク（以下FW）先を福島県浜通りに設定した。

福島をFW先を選んだのは、周知の通り、東日本大震災からの復興が進んでいるがその状況は決して順調とは言えない。特に福島第一原発の廃炉への道は喫緊の課題でありながら、難しい問題のようにとらえられがちで専門家に任せておけばよいという風潮が少なからずある。またややもすれば時間の経過と共に復興と風化が進んでいる中、田中正造型のグローバルリーダーを目指す本校SGHとして原発災害からの復興を継続的に探求していくことはミッションと思われたためである。

現地にて復興の状況と課題を自分たちの目で確かめ、災害からの復興のあり方について学び、アクションに繋げることを目指し研究した。

○協力者・協力機関

澤井史郎氏（目白大学社会学部講師・元いわき市立湯本第二中学校長）

いわき市役所

ふたば未来学園中・高等学校

○FW前の活動

4月にメンバー（1年生14名）を確定して以来、隔週でミーティングを実施し、被災地の状況について理解を深めてきたが、実際の生の声を聴きたいという気運が高まり、5月30日にインタビュー活動を行った。震災時、浪江町で高校3年生であり、現在栃木県立学校で養護教諭をしている佐藤奈緒さんに来校してもらい質疑応答を行った。年齢が近く、親しみやすさも加わり、より身近に被災というものを感じることができ、有意義な活動となった。

○福島フィールドワーク活動

(1) 実施時期 平成31年(2019)年4月～令和元(2019)年12月 クラブ活動

(そのうち福島フィールドワークを令和元(2019)年8月4日～5日に実施)

(2) 研究動機

東日本大震災からの復興が進んでいるがその状況は決して順調とは言えない。特に福島第一原発の廃炉への道は喫緊の課題でありながら、難しい問題のようにとらえられがちで専門家に任せておけばよいという風潮が少なからずある。このような中で、本研究チームは福島浜通りにフィールドワーク先を定めた。福島へのフィールドワークはSGH初年度に実施しているが、現在校生は震災時、小学校低学年であり、その記憶が薄い世代である。ややもすれば時間の経過と共に復興と風化が進んでいる中、田中正造型のグローバルリーダーを目指す本校SGHとして原発災害からの復興を継続的に探求していくことはミッションと思われる。現地にて復興の状況と課題を自分たちの目で確かめ、災害からの復興のあり方について学び、アクションに繋げることを目指し研究した。

(3) 研究方法

主なフィールドワーク先に福島県富岡町およびいわき市を設定した。富岡町においては第4回福島第1廃炉国際フォーラムに参加し、いわき市では震災時中学校長として避難所運営に携わった澤井史郎氏（目白大学社会学部講師）の協力を得て、現地にて

て聞き取り調査を行う。

(4) 主な訪問場所

- ア. J ヴィレッジ (広野町)
- イ. 東京電力廃炉資料館 (富岡町)
- ウ. 富岡町文化交流センター学びの森 (富岡町)
- エ. ふたば未来学園中高等学校 (広野町)
- オ. いわき市豊間地区集会所 (いわき市)

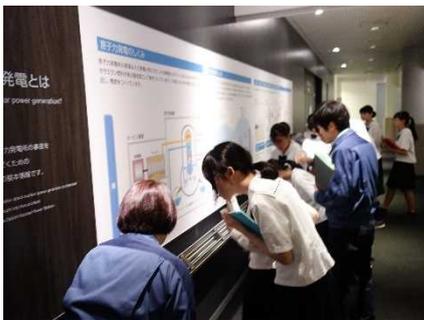
(5) 取り組みへの参加者及び人数

SGH クラブ・研究班 (1年14名)

(6) 現地での活動内容 (要約)

① 東京電力廃炉資料館

東電が原子力事故と廃炉の現状を確認する場として設置した廃炉資料館にて展示物を見学する。特にシアターホールにて見た事故当時の時系列での映像とその後の対応に関するビデオは班員に強烈な印象を残し、最後に流された視聴者へのお詫びの言葉と廃炉の決意を共有する。他にも廃炉現場での様子や作業服・マスクの展示などを見学した。



② 第4回福島第一廃炉国際フォーラム

富岡町文化交流センター学びの森にて開催された本イベントは福島第1廃炉と未来について話し合う目的で被災各地を巡りながら毎年開催されている本フォーラムである。同時通訳の入った会場では東電・経済産業省などの関係者、海外有識者と共に地元の高校生4名が登壇していた。前日からグループワークで意見交換していた高校生たちの堂々とした発表ぶりが印象に残った。ファシリテーター開沼博氏始め、関係者、当事者の方々の奮闘ぶりを目の当たりにし、また討議される話題から、研究への着想を得ることができた。



③ ふたば未来学園中高等学校

同じSGHであるふたば未来学園中高等学校を訪問し、班員が準備したプレゼンテーシ

ョンを行う。夏休みの行事展開中で残念ながら生徒と交流することは叶わなかったが、教頭先生よりコメントを頂戴し、その後、学校内を見学する。ホールでは地域の課題を探求し、演劇として発表するなど特色ある教育活動の紹介があり、班員は自校での取組に思いを馳せた。これを機会として今後も交流していきたいと一同感じさせる訪問となった。



④ いわき市豊間地区集会所

いわき市の海岸線沿いに新たに整備された地区にある豊間地区集会所において、今回お世話になった澤井史郎氏の出迎えを受けFW研修のハイライトと位置づけていた被災復興の現状と課題を当事者の方々から聴くランチミーティングを行った。まず、クラブ員が事前研究した内容について以下のプレゼンテーションをおこなった。

- ・本校概要とSGHとしての取組
- ・原子力発電に代わる発電方法は何か？（エネルギー班）
- ・災害につよいまちづくり（まちづくり班）
- ・東日本大震災時における海外援助と教育者・澤井氏に迫る（ひと・グローバル班）

プレゼン後、2人の方に話を伺った。まず澤井先生から避難所を体育館でなく、各教室にするという信念を貫いたこと、自閉症の子どもに避難所で過ごしてもらうことができなかった後悔、「協働・共同・協同」について、市民として子どもたちを育てるといふ思いが震災後、更に強くなり、様々なボランティア活動に生徒とともに汗を流したことなどを話していただいた。また地元の牧師さんである五十嵐義隆氏より、真のグローバルリーダーとはと題して、田中正造の「真の文明」とは、人権とは、多様性を認めることこそグローバルリーダーの資質である等、含蓄に富んだお話をすべて英語でお話いただいた。限られた時間ながらも被災復興慰霊碑の立つ地で、当事者の方々から本質に迫るお話を拝聴することができた。



(7) 成果と課題

成果：現地の機関（人物）との連携

初日に富岡町で開催された「第4回福島廃炉フォーラム」に参加し、廃炉問題の現状を肌で感じることができた。討議では同世代の高校生たちが将来の姿を真剣に考えている姿に班員たちは感銘を受け、自分たちにできるアクションを考えるきっかけとなった。またフォーラムでファシリテーターを務めた開沼博氏（立命館大学）と出会い、次年度は本校

にてワークショップを開催していただける予定になったことは大きな収穫であった。

2日目には広野町にあるふたば未来学園中・高等学校を訪問し、意見交換をすることができた。本校同様 SGH 校で「災害からの復興」をテーマに据えおあり、今後さまざまな機会をとらえて交流や共同研究などを展開していけると感じられた。

課題：研究の深化と具体的な提言

前述したように班員は震災当時の記憶が薄く、ほぼ予備知識のない状態からの研究スタートであったため、限られた時間の中で十分に研究を深め、具体的な提言をする段階まで至らなかった。しかしながら、班員は皆、事前研修、現地でのフィールドワークを通して意欲的に学び、大いに研鑽することができ、事後活動の展開まで研究を進めることができた。次年度、新たなメンバーも加えてさらなる研究の深化が期待できる。

(8) 事後活動（対外発信）

ア「田中正造の日 環境フェスタ」への参加

佐野市環境政策課より依頼を受け、市民向けのイベントにおいて「持続可能な社会を目指して」と題して報告をすることとなり、準備を進めた。しかし予定された日（10月12日）に台風19号の襲来となり、中止となってしまった。

イ 避難所運営シミュレーション

台風19号で甚大な被害に見舞われ、実際に避難所が開設された経緯もふまえて、静岡県が開発した HUG と呼ばれる避難所運営ゲームを活動の一環として行った。この体験をもとに次年度、地域の皆様とシミュレーションを共有する機会を企画、実施していく予定である。